

カリタス女子中学校

第三回入学試験  
英語資格入学試験

二〇二五年二月二日 実施

# 国語問題

(五〇分)

\*答えはすべて解答用紙に記入すること。

\*字数の指定がある場合は、句読点や記号を字数にふくむこととします。

次の①～③の——部の漢字をひらがなに改め、④～⑦の——部のひらがなを漢字に改めなさい。④～⑦で送りがなを必要とするものについては、送りがなも書くこと。

- |           |            |                  |
|-----------|------------|------------------|
| ① 自重した生活。 | ② 意図をくむ。   | ③ 密かに相談する。       |
| ④ 期日をのばす。 | ⑤ 音色をかなでる。 | ⑥ 一日せんしゅうの思いで待つ。 |
|           |            | ⑦ 車のゆしゅつ。        |

【二】 次の文章【I】【II】を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

【I】

ここで、進化によって<sup>A</sup> 人類の脳がどのように大きくなってきたかを見てみよう。

現代のチンパンジーの脳の大きさはおよそ400ccだが、サヘラントロプス・チャデンシスの脳も同じくらいの大きさだったと考えられている。アウストラロピテクスになると脳が少しだけ大きくなり、およそ500ccとなった。そして、次のホモ・ハビリスでは600〜800ccとなる。さらにホモ・エレクトスでは脳容積は950〜1100ccまで大きくなり、約30万年前に誕生したヒト（ホモ・サピエンス）では脳容積は約1400ccまで拡大した。

このように脳が大きくなるためには、その材料となるタンパク質や脂質<sup>しじつ</sup>を大量に摂取<sup>せつしゆ</sup>する必要がある。肉はタンパク質の固まりであり、脂質も多く含まれることから、脳を大きくするためには格好の食料だったのである。

また、脳は大量のエネルギーを消費する器官だ。ヒトの脳は体重のわずか2パーセントの重さだが、安静時に必要なエネルギーの25パーセントを消費している。このように大量のエネルギーを消費する脳を拡大させる上でも肉はとて役に立った。というのも、肉は高エネルギー食品だからだ。例えば生野菜は100グラム当たり20キロカロリー未満のエネルギーしか含まれておらず、リンゴも50キロカロリーほどだが、100グラムの肉には200キロカロリー以上ものエネルギーが含まれているのだ。肉に匹敵<sup>ひてき</sup>するのはコメなどの穀類とダイズなどの豆類、アーモンドなどの種実類だけだ。

さらに、肉食によって消化管が短くなったことも脳の拡大に役立った。胃や腸などの消化管はとても活動的な器官で、蠕動<sup>ぜんどう</sup>運動や消化液の放出などに大量のエネルギーを消費している。一般的に草食動物は長い消化管を持ち、肉食動物の消化管は短い。食物繊維<sup>せんい</sup>は消化しにくい長い長い消化管が必要なのに対し、肉は軟らかくて消化しやすいからだ。

人類も肉食を進めることによって腸が短くなっていった。チンパンジーとの共通の祖先と比べて、ヒトでは身長に対する腸の割合は約半分になったと考えられている。こうして、腸に使っていたエネルギーを脳の拡大に使えるようになったのだ。

人類が火の利用を始めると、脳の拡大はさらに加速した。火で調理すると、食べ物は消化吸収されやすいかたちに変化し、エネルギーの摂取効率が格段に上昇<sup>じやうしやう</sup>するからだ。例えば、肉を加熱するとタンパク質が変性することによってかみ切りやすくなり、さらに消化酵<sup>じやう</sup>

素で分解されやすくなる。また、穀類やイモ類などのようにデンプンを多く含む食品は、煮たり蒸したりすると軟らかくなり、デンプンも消化されやすい構造に変化する（これをアルファ化と呼ぶ）。

さらに、火は食べ物に好ましい性質を与える。それは「におい」だ。火で調理すると、食品中の成分同士でメイラード反応と呼ばれる化学反応が起こる。このメイラード反応によって、美味しそうなにおいが充満するのだ。

なまのかば焼きの食欲をそそるにおいなどは、どれもメイラード反応によって生まれたにおい分子によるものだ。

このように様々な食材を火で調理することで消化吸収が良くなるとともに、美味しさも増したのだ。

## 〈中略〉

肉食によって脳が大きくなったといっても、脳全体が一樣に拡大したわけではない。脳は全体的に大きくなったが、その中でも狩猟に  
関係する脳領域が特に大きくなっていったのである。つまり、**〈 B 〉** という正のスパイラルが生まれたのだ。

## 〈中略〉

ヒトは他の動物とは異なり、長くて広い「声道」を持っており、ここを巧みに動かして多種多様な音声を発している。実は、この独特の声道を獲得した時に喉の周辺の構造が変化したため、ヒトは他の動物とは違う方法で食べ物のにおいを感じるようになったのだ。

通常、においを嗅ぐ時には、においが含まれる空気を鼻の穴から吸い込むことでにおいを感じる。いわゆる「くんくん」とにおいを嗅ぐやり方だ。この方法についてはヒトも他の動物も同じだ。しかし、これ以外に、ヒトだけが食事中に使用している方法があるのだ。それは、口の中の食べ物から発するにおいを、口の奥にある穴を通して鼻腔に送るやり方だ。

鏡で自分の口の中を覗いてみよう。口の奥の上方に、鼻腔に通じている穴が見えるはずだ。この穴を通して、食べ物のおいが鼻腔に送られるのだ。口の中は小さい空間だし、体温によって温められた食べ物からはにおいが立ちやすい。こうして生まれた濃厚なおいが、その穴を通して鼻腔に送られるのである。

このようなにおいを専門用語で「口中香」と呼んでいる。口の中で生じる香り（におい）という意味だ。私たちが食べている時には、舌で味を感じると同時に鼻腔で口中香を感じており、それらが組み合わされることで食べ物の味わいとなっているのである。

そんな口中香の重要性を確かめる簡単な実験がある。それは鼻をつまんで食事をする事だ。こうすることで口の中の空気が鼻腔に抜  
けなくなり、口中香を感じることができなくなるのだ。

## 2 食べ物の本来の味がしないはずだ。

次に、食べ物をモグモグと咀嚼しながら、鼻をつまんでいる手を離してみよう。豊かで深い味わいが広がるはずだ。このように、私  
たちは口中香を「味」であると錯覚しており、においとしては認識していない。この理由は、味とにおいを同時に感知しているからなのだ。

3、ヒトは特殊な喉の周辺への構造を手に入れることで、言葉をしゃべれるようになると同時に、食べ物のおいを存分に楽しめ  
るグルメになったのである。

ヒトは冒険心にあふれている。約6万年前にアフリカを出て世界中に旅立っていったヒトの中には当時陸続きだったベーリング海峡を  
渡ってアメリカ大陸に進出し、さらに南下して南アメリカの南端まで到達した強者もいた。このようにヒトは、多少の危険などとも  
しない真の冒険者なのだ。

こうしたヒトの旺盛な冒険心は食べ物にも向けられてきた。先史時代からヒトは常に新しい食べ物を探し続けてきたのだ。食べられ  
るものなら何でも食べてみようというのが、祖先から受け継いだ基本的な姿勢なのだ。

例えばイスラエルで発掘された約2万年前のオハローII遺跡からは、ムギ、アーモンド、オリーブ、ピスタチオ、ブドウなど100種  
類以上の種子や果実、そして多種類の魚とガゼル、シカ、ウサギ、キツネ、鳥類の骨などが見つかっており、実に多くの種類のものを食  
べていたことが分かる。

このように新しい食べ物を探し求める行為は、他の動物には見られないものだ。動物は通常新しい食べ物を避けて、食べ慣れたものば  
かり食べる。毒などの危険物を避けるという意味では、これが正しい行動なのだ。

ところがこの方法だと、環境の変化などで主食となる食べ物が激減した場合にとっても困ってしまう。このような危機に陥らないよう  
にするために、ヒトはあらゆるものを食べるように進化したのかもしれない。つまり、グルメは身を助けるということだ。

長い間、ヒト（ホモ・サピエンス）は、野生動物を狩る狩猟と、野生の木の実や種子、果実などを集める採集によって食べ物を得ていた。  
いわゆる狩猟採集生活だ。

現代の狩猟民族の観察から、集められた食べ物は皆に平等に分配されていたと考えられている。また、特定の者に労働が集中しないように、たくさんのお食料を集めることができたメンバーは、次の労働は免除されるなどの配慮もあったと推測されている。すなわち、狩猟採集社会は平等だったのだ。

F やがてヒトは、自らの手で食べ物を作る時代へと突入していく。農耕牧畜の開始だ。それは平等な社会の終わりでもあった。

## 〔Ⅱ〕

農耕と牧畜が始まった本当の理由は確定していないが、獲物となる動物の減少だとする説が有力だ。ヒトの狩猟技術の進歩と人口の増加によって、狩りやすくて肉が大量に得られる大型動物が減少していったと考えられる。さらに、約1万年前に氷期が終了したことが、寒さに強い大型動物の減少に拍車をかけた。また、その後が続いた気候変動によっても獲物となる動物が減少したと考えられている。以上の変化によって、食料になる肉以外の食べ物を見つける必要が出てきたのだ。そこで農耕と牧畜が始まったのだと考えられている。

### 〈 中 略 〉

農耕と牧畜を行うためには定住生活を送る必要がある。また、お互いに助け合った方が効率的に作業できるため、自然に集落がつくられていったと考えられる。そして、効率化が進んだ集落では労働力にゆとりが生まれるようになり、時間をかけて高い技術を要する物を製作できるようになった。こうして、農耕と牧畜の開始にもなつて磨製石器や土器などが作られるようになったのである。

ところで、農耕と牧畜が開始されたことは、狩猟や採集に頼ってきた食料を自らが生産することを意味する。つまり、獲得経済から生産経済への大きな転換点が農耕と牧畜の開始なのだ。

また、農耕で得られた穀物や家畜は比較的長期にわたって保有できるものであることから、農耕と牧畜の始まりは「富」という概念が生まれた時でもある。そして、農耕と牧畜の開始によって、多く持つ者(富める者)と少ししか持たない者(貧しき者)が生まれたのである。

このように、農耕社会では階級が生まれ、社会構造が複雑化していった。そしてこれが文明へと発展していくのである。

〈新谷隆史『食』が動かした人類250万年史〉(PHP新書)より

〔語注〕

※サヘラントロプス・チャデンシス……………人類の祖先。他、「アウストラロピテクス」「ホモ・ハビリス」「ホモ・エレクトス」も人類の祖先。

※蠕動運動……………体の中で食べ物を運ぶために行われる、消化管の動きのこと。

※鼻腔……………鼻の内部。

※咀嚼……………口の中で食べ物をかみくだくこと。

※先史時代……………文字による資料のない時代。

※拍車をかけた……………一段と早めた。

問一

1 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア このように
- イ しかし
- ウ きつと
- エ 例えば

問二

A 人類の脳がどのように大きくなってきたかを見てみよう。とありますが、肉を食べることが脳を大きくすることにつながった理由は何ですか。その答えとなる次の文の「X」～「Z」にあてはまる言葉を、指定された字数で本文中からぬき出して書きなさい。ただし「Z」については最初と最後の五字をぬき出して書きなさい。

肉は脳を大きくするための材料となる「X（八字）」を多く含み、「Y（六字）」食品である上、肉はやわらかく消化がしやすいため「Z（二十七字）」から。

問三 《 B 》 にあてはまる表現としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 狩猟しゅりやうに關係する脳領域が拡大することで肉食化の進行が止まり、その結果、狩猟に關係する脳領域が次第に大きさを變えなくなる
- イ 狩猟に關係する脳領域が拡大することで肉食化の進行が止まり、その結果、狩猟に關係する脳領域がさらに大きくなる
- ウ 狩猟に關係する脳領域が拡大することで肉食化がさらに進行し、その結果、狩猟に關係する脳領域がさらに大きくなる
- エ 狩猟に關係する脳領域が拡大することで肉食化がさらに進行し、その結果、狩猟に關係する脳領域が次第に大きさを變えなくなる
- オ 狩猟に關係する脳領域が拡大することで肉食化がさらに進行し、その結果、狩猟に關係する脳領域が小さくなる

問四 C 多種多様 と似た意味を持つ熟語になるよう、次の二つの□に漢字を一字ずつ入れて四字熟語を完成させなさい。

千□万□

問五 D 鼻をつまんでいる手を離はなしてみよう。豊かで深い味わいが広がるはずだ。とありますが、「豊かで深い味わいが広がる」のはなぜですか。その理由を具体的に説明しなさい。

問六 E 食べられるものなら何でも食べてみようというのが、祖先から受け継ついだ基本的な姿勢なのだ。とありますが、このような姿勢を身につけた目的を筆者は何だと考えていますか。本文から読み取って、四十字以内で答えなさい。

問七

F やがてヒトは、自らの手で食べ物を作る時代へと突入していく。農耕牧畜の開始だ。それは平等な社会の終わりでもあった。の部分について【Ⅱ】の文章を読んで生徒たちが読み取ったことが、次のア～オです。本文の内容に合っていないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A 獲得経済である農耕と牧畜で得られた穀物と家畜は、比較的長く保存ができるため多く持つ者と少ししか持たない者という貧富の差が生まれることになったんだな。

イ 生徒B 農耕と牧畜を行うためには同じ場所に住み続けることが必要で、お互い助け合った方が仕事もはかどるから、自然と集まって住むようになったことがわかった。

ウ 生徒C 農耕社会では身分や地位などのくろいが生まれ、社会の仕組みが複雑になっていったんだね。それがやがて文明に発展していくことになったわけか。

エ 生徒D 農耕と牧畜の始まりはヒトの狩猟技術の進歩や氷期の終了、その後の気候変動によって獲物となる動物が減少したことが大きな原因だということなんだね。

オ 生徒E みんなで仕事をしてこれまでよりもはかどれば、時間に余裕もできてじっくり時間をかけて技術の必要な道具を作ることもできるようになったんだ。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。※の言葉には、文章のあとに注をつけてあります。

自転車に跨がり、来た道を戻って家に着くころには、すっかり暗くなっていた。

「凜子、こんな時間までどこ行つてたの」

玄関を開けると、お母さんが焦った様子で私を出迎える。

「ちょっと散歩してくるって言って、なかなか帰ってこないし、電話しても出ないし、心配したのよ」

「え、ああ、ごめん。自転車に乗ってたから気づかなかった」

スマホを見る習慣がないので、家を出てからポケットに入れっぱなしで、一度も見えていなかった。お母さんに言われて取り出すと、メッセージや不在着信がいくつも残されている。

「ごめんなさい……」

「まあ、無事に帰ってきたなら、いいんだけど」

しゅんと **1** を落とすと、お母さんははっとしてぎこちない笑顔を浮かべた。自分の感情をぐっとこらえて、私を気遣うためのものだ。

それを見ると、胸が苦しくなる。

ごめんなさい、ともう一度口にしようとして、呑み込んだ。ここで謝ったら、また同じような顔をさせてしまう。

「もう片づけ終わった？」

そのかわりに笑って話題をかえる。

玄関にはたたんだ段ボールが箱に詰められている。お母さんは「大体ね」と言ってから、「ご飯にしましょう」とキッチンに入った。

「おかえり凜子。海はきれいだったか？」

リビングの買ったばかりのソファでくつろいでいるお父さんが、缶ビール片手に振り返って私に聞いてきた。私とお母さんの会話が聞こえていたのだろう。うん、と私が答えるとうれしそうに **2** を細める。

ダイニングテーブルには、天ぶらの添えられたぶっかけうどんが並べられた。出来合いのものを近くのスーパーで買ってきたらしい。

引越すそばのつもりようだ。そばじゃない理由は、私がうどんのほうが好きだから。

「爽子、ご飯よ」

お母さんが階段から二階に向かって叫ぶと、しばらくして三歳年下の妹、爽子がそのそと降りてくる。セミロングの髪の毛をうしろにひとつにくくっているの、ずっと部屋の片づけをしていたのだろう。

爽子は部屋にお気に入りの小物をたくさん並べていたから、時間がかかっているに違いない。今ハマっているアイドルグループのポスターもきれいに壁に貼りつけていたはずだ。

目が合うと、すいとそらされる。

おしゃれなカウンターキッチン前のダイニングテーブルに、お父さんとお母さんとなり座り、向かいに私と爽子が座る。

お母さんは、近くのスーパーは以前よく行っていたスーパーよりも品揃えがいいとよろこんでいた。お父さんは今度の休みは四人でドライブに行こうと誘ってきた。

ふたりはずっと笑顔で話をしている。私はできるだけ明るい相槌を打ち、逆に妹は不満そうに口を尖らしながら頷いていた。

一ヶ月ほど前から、家族の食卓には、妙な緊張感が漂っている。

そんなふうを考えるのは、私だけなのかな。

〈 中 略 〉

昼過ぎには自分の部屋の片づけを終わらせ、せっかくだしと思い、ひとり自転車でこの町を探索した。

最寄り駅までは自転車ですら三十分以上かかった。時刻表を見れば電車は一時間に三本しか来ない。路線図を見てスマホで確認すると、ここからそれなりに大きな街に出るには一時間ほどかかるようだ。

ただし、それなりだ。

本当に賑やかな場所に行くには一時間半以上かかるらしい。私は書店があれば充分なだけけれど、流行のものを追い求める爽子にとつては不便だろう。

私の視界に映る景色は、高い建物がほとんどないからか、半分以上が空だった。

地図を見ることなく三時間以上うろろして、見かけたコンビニはたった三軒。そのかわり、個人商店のようなお店が多くあった。一応、**I** ファミリーレストランやファストフード店もある。大きくはないけれどスーパーだってあった。田舎というほどでもない。

けれど都会にはほど遠い。

それがこの町に対する私の第一印象だ。

ただ、以前住んでいた街の景色よりも、私はこのほうが好きだ。

海と山、両方が近すぎない距離にあるのがいい。視界が広いのがいい。

**B**

これから私は、この町で、新しい環境で、過ごしていく。

窓に近づいて、暗闇の広がる外の景色を見つめる。見えないけれど、この先に今日見たあの海がある。夜の景色もきれいだろう。

あの夕焼けの海は、本当に美しかった。

……途中であの派手な男の子に邪魔されたけれど。

思い出して顔をしかめる。

「……とにかく、がんばらないと」

**II** 頭を振って気持ちを切り替える。

私は、きつとこの町を好きになれる。数日後からはじまる学校生活のためにも、心地よい世界が目の前にあるほうがいい。

だから、大丈夫だ。私は新しい私を、がんばれる。がんばろう。

クローゼットの扉にかけられた、まだ一度も袖を通してない新しいグレーのセーラー服を見て、私は誓った。



「僕が担任の兼松です。よろしくお願ひします」

二学期初日、転入一日目ということで始業時間よりはやめに学校にやってきた私に、四十代くらいの男の先生がぺこりと頭を下げた。

大きな体だけれど、垂れ目だからかやさしそうに見える。口調もやわらかい。

「緒沢凜子です」

私も頭を下げて、安堵のため息を吐く。

いや、でも見た目で判断してはいけない。それに、先生がどんなひとであっても、私は私がすべきことをすればいい。そうしなくちゃいけない。

先生のやさしそうな雰囲気<sup>ふんいき</sup>に甘えそうになった自分を叱咤<sup>しつた</sup>して顔を上げた。

「この学校で楽しく過ごせるようがんばります、よろしく願います」

にこっと微笑<sup>ほほえ</sup>むと、兼松<sup>かねまつ</sup>先生は「きみならきつとたくさん友だちができるよ」と小さく頷<sup>うなず</sup>きながら言った。たくさんって、何人くらいいればいいんだろう。

とりあえずクラス全員、かな。せめて女子全員。

それがどれほど難しいのか、私には、よくわからない。

——『みんなと仲良くしましょう』

小学校のころ、教室のうしろに当時の担任<sup>たんじん</sup>が書いたであろうクラスの目標<sup>もくひょう</sup>が貼<sup>は</sup>られていたことを思い出した。

みんなと仲良くって、どうやるんだろう、とぼんやり思った記憶<sup>きおく</sup>がある。仲良くってどういうものなんだろう、とも。

きつと、仲良くなれば友だちになれるのだろう。

とにかく、私はこの町でたくさん<sup>わたし</sup>の友だちを作る。

それが、この学校で過ごす一年半のあいだの、目標だ。

教室には、始業式<sup>しぎょうしき</sup>が終わったあとに向かうことになった。そのため、式のあいだ先生たちのそばの壁際<sup>かべぎわ</sup>に立って校長先生の話を聞く。

むうっと蒸<sup>む</sup>し暑い体育館<sup>たいいくかん</sup>に詰め込まれて、息苦しい。じつとりと額<sup>ひたい</sup>に汗<sup>あせ</sup>が浮かんでくる。

おまけに、生徒たちがちらちらと物珍<sup>ものめず</sup>しそうに私のほうを見ているので落ち着かない。

……やっぱり転入生はどこの学校でも目立つんだなあ。まあ、先生たちにまじって見慣れない生徒がひとり立っていれば気になるのは当然か。

できるだけ視線を無視して過ごそうとした。

けれど、視界のすみに、やたらと明るいなにかが映り込む。

眩しい夕日みたいな、なにか。

惹きつけられるように視線を向けると——それは、数日前に海で見かけた男の子だった。

水面に映った夕焼けのような、ほんのりと赤みを帯びた明るい薄オレンジの髪色の彼が、まわりにいる男子たちと笑っていた。壇上にいる校長先生の話はまったく聞いていない様子だ。

同い年くらいだとは思ったけれど、まさか同じ学校だったなんて。

ふいに、彼がこちらを見て、目が合う。

彼は、あ、と言ったのか口を大きく開けて、

彼が私を覚えていたことに驚きつつ、気づかなかったフリをしてすっと目をそらす。

……どうしよう。

この町の狭さを知っていたら、彼にあんな素つ気ない態度を取ったりはしなかったのに。どうして笑顔で言葉を交わさなかったのか。今さらながら後悔する。

にしても、彼はどうして私に手を振ったのか。

自分で言うのもなんだけれど、あの日の私は相当感じが悪かったはずだ。なんだあいつ、と怒っていても不思議じゃないのに。

ちらっと彼のほうに再び視線を向ける。

彼はさっきと同じように友だちと楽しそうに雑談をしていた。私の話をしていてではないかと不安になるけれど、誰もこちらを見ないので、まったく関係のない話に夢中になっているようだ。

チャラくて口が軽そうだから、私と会ったことやそのときの私の態度について言いふらすんじゃないか、と思ったけれど、そうでもない、かもしれない。

見た目で判断し、失礼なイメージを抱いてしまったことに申し訳なくなる。

ほっと **3** を撫で下ろしつつ、心の中で祈る。

どうか、彼と同じ学年ではありませんように。

間違っても同じクラスなんかにはなりませんように。

悪い人ではないかもしれないけれど、それとこれとは別の話だ。

この町でうまくやっていこうと思っていたので、あの日の私を知られている相手とは極力接点を持ちたくない。気まずいし、どう振る舞えばいいのかわからない。

だから、どうか。

ずっと視界のはしにちらちらと映る夕日の彼を意識しながらそう思った。

けれど。

「やっぱりうちのクラスの転入生だったかー。オレのこと覚えてる？」

始業式が終わってから兼松先生に案内されて教室に入ると、彼がそう声を上げた。

最悪だ……！

なんで同じクラスになるんだ！

引きつった笑みを顔に貼りつけながら、この場をどう切り抜ければいいのか必死に考える。

「将暉、転入生と知り合いなのかよ」

「どんだけ顔広いんだよ、和久井」

まわりの男子たちが彼——和久井将暉というらしい——の肩をたたいて笑う。「ナンパ？」「ちげえよ」と大声で話をする男子たちに、

クラスの女子はクスクスと笑っている。

彼はクラスのムードメーカー的な存在なのだろう。

「このあいだ、たまたま海で会ったんだよ。なあ？」

突然私のほうを見て、彼が同意を求める。

一瞬だけぎくりと体を震わせてから、何度も練習した笑顔を作った。

「はい、まさかまた会うとは思わなかったからびっくりしました。あ、緒沢凜子です、よろしくお願いします。みんなと仲良くなれたら

うれしいです」

彼との会話を途中で終えて、挨拶をした。

にこのこと笑みを絶やさないと私に、クラスみんながばちばちと拍手をする。なんの拍手だろうなああとほんやり考える。

彼は、ちよつと驚いた顔をして私を見ていた。

E 余計なことは言わないで、と心の中で必死に彼にテレパシーを送った。そのおかげかどうかはわからないけれど、彼は「ほらな」と男子に言うだけで、あの日の私の態度には触れなかった。

空気を讀むのに長けているようで、ほつとする。

さすが、友だちが多いひとだ。

〈櫻いいよ『世界は「」で沈んでいく』(PHP研究所)より〉

## 〔語注〕

※夕焼けのような………夕焼けのような

問一

1 3 にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア 眉まゆ
- イ 目
- ウ 肩かた
- エ 胸
- オ 腹

問二

I II III にあてはまる言葉としてもっともふさわしいものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。記号は一度ずつしか用いないこととします。

- ア こそこそと
- イ のろのろと
- ウ ひらひらと
- エ ぶんぶんと
- オ ぽつぽつと
- カ わらわらと

問三

A 妙な緊張感きんちやうかんとありますが、本文中にはこの「緊張感」につながると思われる描写びやうがいくつかあります。それにあてはまらないものを、次のア～キ（本文の~~~~~の箇所）の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア お母さんははっとしてきこちない笑顔えがおを浮かべた。
- イ そのかわりに笑って話題をかえる。
- ウ 私わたしとお母さんの会話が聞こえていたのだろう。
- エ 出来合いのものを近くのスーパーで買ってきたらしい。
- オ そばじゃない理由は、私わたしがうどんのほうが好きだから。
- カ 時間がかかっているに違ちがいない。
- キ 目が合うと、すいとそらされる。

問四

これから私は、この町で、新しい環境で、過ごしていく。とありますが、〈中略〉の部分には「中学二年の二学期がはじまる直前の今日、私はこの町に引っ越してきた。」という一文があります。「私」の一家はどういう理由で引っ越すことになったと考えられますか。その答えとなるように、次の文の「①」「②」「③」に入れる言葉を書きなさい。

「①」の「②」での「③」に問題があったから。

\* 「①」には人物、「②」には場所を表す言葉が入ります。「」の長さは、字数とは関係ありません。

登場人物の名を答えの中に入れる場合、漢字をひらがなに直して書いても構いません。

問五

私がすべきこと とありますが、それは具体的にどのようなことでしょうか。三十字以内で書きなさい。

問六

なんの拍手だろうなあとぼんやり考える。とありますが、このときの「私」はどのような気持ちだったでしょうか。答えとしてもつともふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 拍手されてうれしいわけでもなく、ひとごとのように冷めた気持ち。

イ 思わぬことに動揺したが、なんとか切り抜けられてほっとした気持ち。

ウ 練習してきた笑顔や挨拶がうまくできて、うれしくてたまらない気持ち。

エ 初対面の人たちの前に立って緊張しすぎて、わけがわからない気持ち。

オ みんなが本心から拍手しているのかどうか、疑わしいと思う気持ち。

問七

余計なこと とありますが、それはどのようなことでしょうか。わかりやすく説明しなさい。



